

●「舟入祭」を成功させよう。

「協力」「団結」「集中」

舟入祭まであと7日



- ◆金券前売り 2年生 6月13日(火) 12:45~13:10 500円単位で購入
- ◆準備日程 準備期間 6月5日(月)~6月9日(金) 17:30 (18:00延長可)
準備期間 6月12日(月)~6月15日(木) 18:00 (18:30延長可)
19:00 完全下校 厳守

◆16日(金)の主な日程

◆17日(土)の主な日程

8:30 SHR	8:15 講堂入場・点呼・諸注意
8:45 講堂入場・点呼	9:00 発表開始
9:00 開会式 開会セレモニー	14:15 食品バザー終了
10:25 SHR → 机・椅子の移動	14:30 全発表終了→ 片づけ
15:10 クラス点呼、清掃	15:05 講堂入場 開会式 退任行事
16:45 作業終了	15:45 後片付け 清掃
17:00 ~生徒会校内見回り	

●舟入祭が終了 → 次は第1回考査(6月26日~30日)

- ・今から準備していく。授業への一層の「集中」。何度も繰り返す。
2度3度は当たり前。5度、6度とやれるかが勝負の分水嶺。「出力」の回数を増やす。
- ・考査時間割発表 6月12日(月) ※試験時間は60分になる教科がある。

●夏の計画は今から 以下の点についてまず日程を書き込み、全体を掌握していく。

- ・別紙配付の7、8月の夏の計画表に記入してみる。

<計画のポイント>

- ①夏季休業は29日間。
- ②補習の申込はどうするのか。
- ③オープンキャンパスの日程はいつか。
- ④部活動の計画はどうか。
- ⑤語学研修等、個人の予定はどうなっているか。(準備等の時間も含める)
- ⑥夏季休業中にやるべき課題、模試の復習、苦手科目の克服などに充てられる学習時間はどの位あるか。

- 夏季補習の申込 6月20日(火) 申込締切 厳守
- 教科仮登録 提出締切 6月23日(金) 厳守
- 広島大学入試説明会 7月3日(月) 申込締切 6月14日(水)

★申込はすべて早め早めに行う。締切日より早く出す習慣をつける。

● プロ ボクサーに「学ぶ」 村田諒太選手

“人生に意味を求めてはいけない。人生からの問いかけに答えていくことが大切” (精神科医 フランクルの言葉)

ロングインタビュー番組 (5月30日 NHK 「クローズアップ現代+」) を視聴して

先月5月20日 (土) 「WBAボクシングミドル級の世界王座決定戦」で、ロンドン五輪金メダリストの村田諒太選手が世界チャンピオンの座に挑戦した。12ラウンドの激戦の末、判定負けとなった。この判定は物議を醸し、前代未聞とも言われる「再戦指令」が出されることとなった。

番組では、この試合を振り返るだけでなく、プロに転向してからの、戦うことの“恐怖”を乗り越えるために、哲学書や心理学書を読みあさってきたという村田選手の「戦う哲学」が紹介されている。

デビュー戦前夜、涙で声を詰まらせながら電話をかけてきた村田選手に、父親の誠二さんは、息子にかける言葉のかわりに心理学や哲学の本を送ったそうだ。その中にある言葉の数々が、村田選手にしみこみ、今も支えになっている。



“これまでの人生に何があったとしても、今後の人生をどう生きるかについて、なんの影響もない。自分の人生を決めるのは、「いま、ここ」に生きるあなたなのだ。” (アドラー 心理学者『嫌われる勇気』より)

他人がどう思うかは、全くコントロールできないこと。では、何がコントロールできるのか。それは、自分がどうするかということだけ。それだけがコントロールできる。そして、そのことだけに焦点を合わせる。

ボクシングにおいてコントロールできるものは何か。

- ①レフェリーの判断、これはコントロールできない。
- ②ジャッジがどういうふうな判断をするか、これもコントロールできない。
- ③観客が自分のプレーに対して喜んでくれるかどうか、全くコントロールできない。
- ④コントロールできる唯一のものは、やはり自分のプレー。

敗戦から1週間、この1週間にも支えられた言葉があり、それが、冒頭の言葉“人生に意味を求めてはいけない。人生からの問いかけに答えていくことが大切”である。

「判定おかしいだろう、俺勝ってたよ」と例えば言うことが、人生からの問いかけに対しての最良の答えなのか。人生に対しての最良の答えは何なのだろうと、それを常に探していく。不幸なことがあったりとか、納得のいかないことがあって、何でこうなるんだって人生に対して文句を言ってしまうのがない…。と村田選手は語っています。

● 「哲学」とは何か。「言葉」が人を支えるとはどういうあり方を言うのか。

村田選手が、この対戦(敗戦)で「学」んだことは何か。

村田選手の発言、競技生活、その生き様に、われわれもまた「学」ぶことができそうです。